

国内の牛肉需給と和牛生産

主任研究員 長谷川晃生

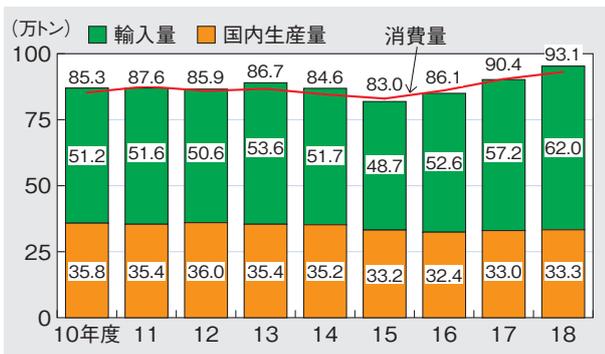
ここ数年、牛肉の消費量は、焼肉等の外食を中心に需要が高まり、増加している。こうしたなか、国内の肉用牛生産について和牛を中心に動向を分析する。

1 増加に転じた和牛生産

国内の牛肉供給量の6割を占める輸入は2016年度から増加に転じている(第1図)。18年度は62万トンで、01年以来の高い水準である。一方、牛肉の国内生産量は15年から年間33万トン前後で推移している。したがって、16年からの消費量増加は輸入によりカバーされている。

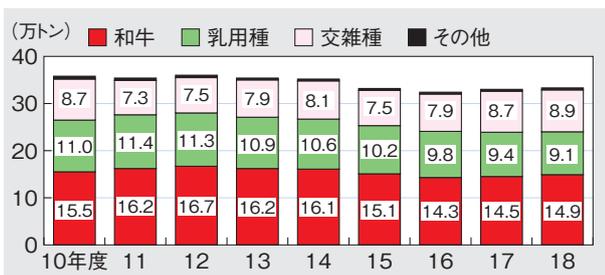
国内生産を品種別にみると(第2図)、和牛の生産量が最も多く4割を占め、交雑種、乳

第1図 牛肉需給の推移(部分肉ベース)



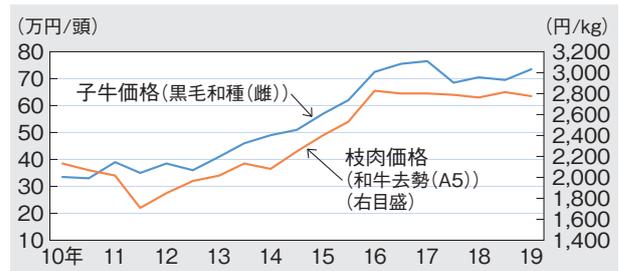
資料 農林水産省「畜産の動向」
 (注) 消費量は生産量、輸入量、輸出货量および期末在庫より推計した推定出回り量。

第2図 肉用牛の国内生産量の推移(部分肉ベース)



資料 農林水産省「畜産・酪農をめぐる情勢」

第3図 黒毛和種の子牛価格と和牛の枝肉価格の推移



資料 農畜産振興機構Webサイト
 (注) 毎年の3・9月のデータを掲載。

用種が同程度である。和牛は17年から、交雑種は16年から増加に転じ、乳用種は12年から減少傾向にある。

乳用種は安価な国産牛として消費者に供給されてきた。しかし、その生産量は減少している。これは、酪農経営体での性別別精液の利用が普及し、後継牛(雌)の確保が効率的になり、肉用となる雄の出生数が減少したためである。

和牛の増加は、繁殖基盤の回復が主因である。これまで高齢化や後継者不足による繁殖経営体の減少で、和牛子牛の出生頭数は減少してきた。牛肉の枝肉価格が上昇し(第3図)、肥育経営体の増頭意欲は向上したが、子牛供給が伴わず、13年から17年にかけて子牛価格(黒毛和種)は大きく上昇した(第3図)。その後、国の生産基盤強化対策等で繁殖雌牛の飼養頭数は16年から増加に転じており、今後も和牛生産の増加が見込まれる。

2 和牛は高格付の割合が上昇

和牛の肥育経営に注目すると、子牛価格の高止まりで、大規模経営体を中心に子牛生産を含む一貫生産への転換が進んでいる。

また高価格販売が見込める脂肪交雑が多い高格付へと生産がシフトしている。格付は歩留等級(A～C)と肉質等級(5～1)の組み合わせである。最も格付が高いA5の和牛全体に占める割合は、18年までの10年間で16%から35%へと上昇している。また脂肪交雑の多さ等から判定する肉質等級は5等級、4等級を合計した割合が51%から73%へと高まっている。

大手食肉卸への聞き取りによると、和牛は高格付が中心のため品揃えの幅が狭く、消費者の低価格志向が強いなかで、枝肉価格の上昇分を価格に転嫁できないため、取扱いが難しくなったという。また、国産の乳用種は量が確保できないため、輸入牛を増やしたいと考えている。

3 輸出が生産を下支え

このため、和牛の供給先として輸出が重要となっている。牛肉の輸出先はカンボジア、香港、台湾、アメリカが中心で、輸出量は15年(1,611トン)から18年(3,560トン)にかけて倍増している。牛肉の国内生産量全体に占める輸出の割合は1%程度であるが、銘柄牛のなかには輸出割合が1割に上るところもある。

牛肉輸出は和牛が中心とみられ、部位は高価格なロイン系(ヒレ、サーロイン等)が重量ベースで過半を占め、輸出が和牛の価格や生産を下支えしていることが指摘されている。

4 高齢層の牛肉消費に変化

国内消費は、タンパク源が中長期的に魚介類から肉類へとシフトしてきた。こうしたなかで、特に高齢層の肉類の消費量の変化が注目される。

厚生労働省の調査によると、1日1人当たりの肉類の消費量は、この10年間で、60歳代

第1表 肉類の1日1人当たり消費量(平均値)

(単位 g、%)

	総数	年齢別						
		20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	80歳～
07年	82.6	105.8	102.2	96.8	77.2	63.8	51.0	
17年	98.5	129.4	114.7	115.0	105.2	92.4	75.3	63.0
07年比増減率	19	22	12	19	36	45	—	—

資料 厚生労働省「国民保健・栄養調査」
(注) 肉類は、主に牛、豚、鳥とそれらの加工品。

第2表 牛肉の1日1人当たり消費量(平均値)

(単位 g、%)

	総数	年齢別						
		20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	80歳～
11年	14.0	23.6	17.6	15.9	16.4	10.7	9.0	
17年	14.3	19.6	16.7	15.6	16.1	13.6	12.4	12.1
11年比増減率	2	-17	-5	-2	-2	27	—	—

資料 第1表に同じ

では4割超増加し、年齢区分が変更された70歳以上層も増加している(第1表)。また牛肉も、遡及可能な範囲でみると、高齢層の増加が顕著である(第2表)。

高齢層向けの栄養指導では、重要なタンパク源である肉類の適切な摂取が推奨されるようになっている。こうしたことが、これまでの同世代に比べて牛肉の消費量が増えた一因であり、高齢層の消費拡大が、消費全体の押し上げに寄与したものと考えられる。

5 和牛生産の新たな動き

和牛生産は、輸入牛肉との差別化を図るために、これまで脂肪交雑を増やすことが重視されてきた。しかし、最近では、脂肪の質等に注目した畜種改良や、脂肪交雑を抑えた和牛生産に新たに取り組む動きもみられる。牛肉の消費量が回復基調にあるなかで、消費者の多様な需要をいかにして国内生産に取り込んでいくかが重要となっている。

<参考文献>

・高橋昂也・前田幸嗣・福田晋(2019)「牛肉輸出の価格および生産の下支え効果」『畜産コンサルタント』5月号

(はせがわ こうせい)